

二国間交流事業 共同研究報告書

令和5年4月27日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]
早稲田大学 政治経済学術院
[職・氏名]
教授 浅野豊美
[課題番号]
JPJSBP 120208817

1. 事業名 相手国: 韓国 (振興会対応機関: NRF) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) 東アジア型和解理論の構築—人権被害者と移行期正義論をめぐる国民的記憶・価値・感情

(英文) Formation of International Reconciliation Theory in East Asia: Joint application of Victim centered-approach of Transitional Justice with memories, values and national emotions

3. 共同研究実施期間 2020年4月1日 ～ 2023年3月31日 (3年0ヶ月)【延長前】 2020年4月1日 ～ 2022年3月31日 (2年0ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Chun Ja-hyun, Associate Professor, Department of International
Relations / EIC, Yonsei University

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		2,211,447 円
内訳	1年度目執行経費	1,071,636 円
	2年度目執行経費	1,139,811 円
	3年度目執行経費	0 円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	5名
相手国側参加者等	8名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	0	0	0
2年度目	0	0	0
3年度目	3	0	0

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣:委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入:相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流の概要・成果等

(1)研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

2020年度と2021年度、四回にわたり Zoom による会議を開催した上で、コロナ明けの 2022 年度の 12 月に直接日本側から韓国に渡航して交流を行った。参加者たちはそれぞれの最新の研究成果を発表しただけではなく、和解の概念や、東アジア発の和解学の理論、ならびにアジアの移行期正義における和解の課題など、幅広いテーマをめぐり討論を重ねた。当初計画された対面の研究会を頻繁に開催することができず、韓国側メンバーが入れ替わらざるを得なかったが、リモートという形で共同研究を進めることができた。対面の交流と比べれば不十分かもしれないが、コロナ感染拡大という特殊な事情にもかかわらず、当初の共同研究目標は概ね達成されたといえる。日本側は浅野が歴史紛争の構造を論じ、和解の概念分類にともなう集合的感情分析と、感情が喚起される構造を論じた。梅森直之が移行期正義論に焦点を当て、ハンナ・アレンとの思想を読み替える作業に取り組んだ。金泰植は韓国のアイドルのソフトパワーを論じ、黄斌は中国国内における和解をめぐる論争、佐藤雪絵は韓国国内における人権の政治問題化を中心に研究を進めた。韓国側代表者の千慈賢は、国際関係学の観点から日韓関係を再考し、韓国側参加者の研究を統括しつつ、日韓関係の国際関係学的側面の分析を主に研究を進めた。韓国側参加者としては、金キジョンが東アジア各国の外交政策、呉スンヒが日中関係、金サンジュンが日韓国内政治の分析を行った。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

本プロジェクトでは、普遍的価値が国民や集団に共有される記憶の選択に際して重要な機能を果たしていることに注目しながら、価値と記憶の結合によって生み出される集合的な感情に着目し、国民感情が衝突する構造が議論の中心となった。産業発展に成功した東アジアという、特殊な歴史的な背景によって、人権と自由という価値に対抗するかのように、豊かさや発展という価値が政治的対立の中に引き入れられ、歴史問題が生まれることが指摘された。

和解概念を、「政府間和解」、「国民間和解」、「市民間和解」という三つに概念的に整理し、第二次大戦後の日本の民主化と経済復興、1960 年代末期からの韓国での開発独裁体制下の発展、およびそれに続いた民主化によって、それぞれの国内において共有される記憶と価値の結合のあり方がいかに転換したのかにも、大きな焦点が当てられた。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

2021 年 12 月に日本政治学会と合同して開催された韓国政治学会のパネルにおいて、国内政治と国際政治が共振する現象として歴史問題を位置づけ、国内政治上の激しい対立が、国際政治のソフトパワーをめぐる対立と連動している点について議論は盛り上がった。また、後述するように最終年度には、対面にて今度は韓国内部のパネルとして、韓国政治学会で報告を行った。今年度は向こう側の代表の Chun 先生と綿密な打ち合わせを行うことができ、何度も英語で本を出版する可能性についても議論を始めている。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

国際和解学会の 2025 年度世界大会がソウルを舞台に、カウンターパートである延世大学の Chun

教授も優良なメンバーとして開催される見込みとなった。国際和解学会は設立（2020年10月）されて以後、2023年度にいたるまで毎年、世界大会を開催し、2022年夏はワシントンでDCで初めて対面で大会を開いた。お互いの人格の一部となっている集合的な記憶や、それをめぐる感情的な議論自体を対象化して学問として体系化して語るための知的インフラの構築は、社会全体に対する貢献である。それにChun教授を中心とする韓国チームと共に、取り組むことができるようになったことが最大の社会貢献である。国際和解学会は、紛争解決学をメインとする米国のジョージ・メーソン大学、旧東ドイツのイエナ大学との連携の上に設立された。関連学問への波及効果を象徴しており、それに向けてさらなる交流を展開したい。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

大学院博士課程の学生である佐藤雪絵は、台湾から東京を経由して2022年度の韓国政治学会に参加した。その後に佐藤は、独自の調査を韓国で行い、その成果をよりよいものにする作業を行なった。佐藤雪絵は、当研究グループのプロジェクトである和解学叢書翻訳編の翻訳の実務にたずさわって、光州事件についての研究を進め、2020年度の日本学術振興会特別研究員（DC2）に採用されている。また、金泰植は、日韓の間で国境を越えて活躍するアイドルについての研究や、消費されていく大衆文化がどのような社会的な文脈で、家庭の中で消費されているのかという文脈を研究し、アジアドラマカンファレンスというメディア関係者の日韓交流の現場でも活躍している。

長い間できなかった対面での交流を、韓国滞在の間に行うことで、今後活躍するであろう若手研究者の多くと知り合い、若手研究者を国際的に育成するための基盤として、韓国側の研究代表者との交流に努めた。

(6)将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

国際和解学会を韓国で開いていただくための枠組みが、徐々にではあるが整備されつつある。国民に共有される感情や記憶を正面から見据えて、新しいディシプリンに挑戦しながら、日韓の研究者でパネルを組んで発表し、欧米の研究者からコメントをもらえる場ができようとしている。これまでの文脈では、歴史問題の研究は、学問的には周辺的な領域に置かれて、学問的・良心的であるほどに、様々な社会的反発やイデオロギー的に傾斜した運動に巻き込まれることが憂慮され、忌避される傾向が強かった。しかし、こうした場が整備されれば、むしろ東アジアの現実に即した世界的な理論を発信する可能性を秘めている。

移行期正義論という学問が、南米やアフリカという経済発展に成功できなかった地域を対象にしてきたのに対して、経済発展に成功した東アジアにおいて、ナショナリズム論と関係させる形で、発展の陰に人権が隠される構図や、国民という集団自体を統合されつつある存在としながら、国内政治と国際政治を論じる視点は、新鮮なものとして世界に発信される可能性を秘めている。世界的に、ナショナリズムの濫用や、近隣諸国との領土・歴史問題にともなう「右傾化」やポピュリズムに焦点が当たっており、こうした視点から、今回の研究成果を英語で発信していくことに努めたい。

(7)その他(上記(2)～(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

例:大学間協定の締結、他事業への展開、受賞など

2022 年 4 月に、文部科学大臣表彰として、科学技術賞(研究部門)を受けた。その際のタイトルは、「歴史学と紛争解決学を包摂する新領域としての和解学創成研究」であったが、この二国間交流事業は、和解学に連携する韓国の研究者との重要な橋渡しのためのプロジェクトとなった。

延世大学で日本政治の研究に長く取り組んでこられた、KIM, Sang-jung 教授のゼミに招かれて、講演をさせていただいた。また、ソウル大学の先生とも、Chun 先生と協力しながら国際和解学会をソウルで開催する可能性を話した。